

Glomus Tumor と之に似た指尖 Granuloma

岐阜県立医科大学第1外科学教室（指導：鬼束惇哉教授）

田 原 浩 明・馬 場 容 二

〔原稿受付 昭和34年7月13日〕

GLOMUS TUMOR AND GRANULOMA OF THE FINGERTIP

by

HIROAKI TAHARA and YOJI BABA

From the 1st Department of Surgery, Gifu Prefectural Medical School
(Director: Prof. Dr. ATSUYA ONITSUKA)

Glomus tumor is rare in our country. Recently we experienced a case of glomus tumor arising beneath the nail of the right third finger and a case of granuloma at the base of the left fourth finger nail.

In the former, local pain is the chief complaint and in the latter bleeding. Both patients are cured by extirpation. According to microscopic specimens, these are found to be utterly different diseases.

The literature of glomus tumor has been reviewed.

緒 言

吾々は最近指末節に小腫瘍を生じた2症例に遭遇した。1例は肉芽腫であり、他の1例は典型的な Glomus tumor であった。後者については我国での報告例は未だあまり多くないので症例追加を兼ね両者の比較観察を試みる。

症 例

第1例：29歳女子

約1カ月前に左第4指の爪根部皮膚にさかむけを生じ出血した。後に痂皮を被りその痂皮が脱落した跡に疣状の弾性軟、出血性の小腫瘍を生じた。疼痛は始めからなかった（図1）。

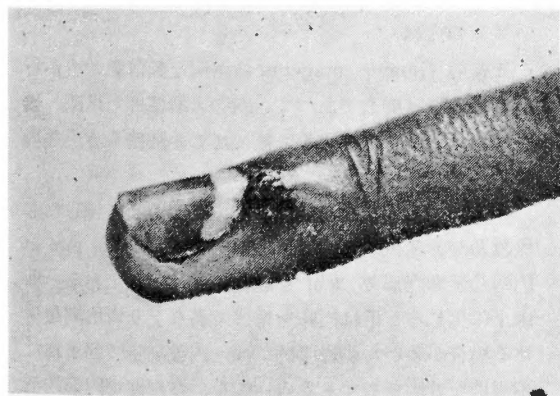


図 1

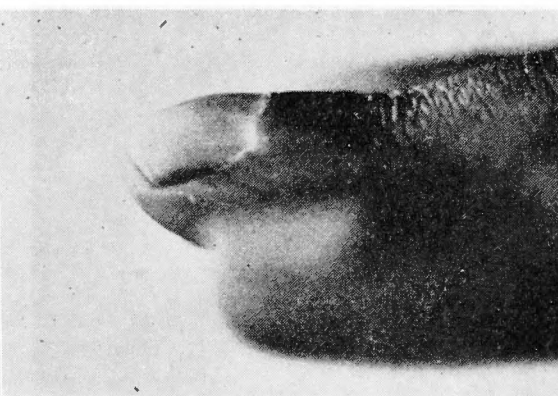


図 2

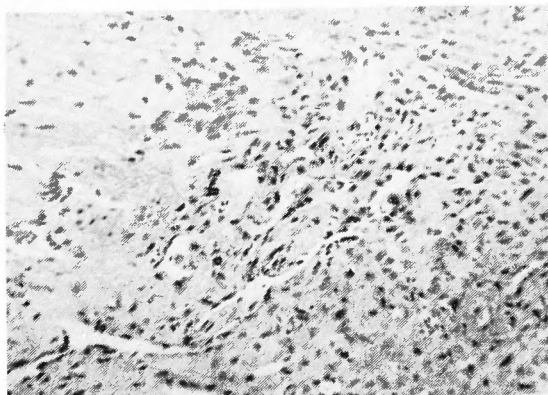


図 3

第2例: 44歳男子

4年前右第3指の爪部を打撲しそれによる疼痛は間もなく消失したが約1年後に該部に自発痛を伴うて爪が変形して来た。某医にその爪を抜去されたが疼痛が依然輕快せぬと称して吾々の外来に來た。診ると図2の如く右第3指の爪体より爪根部にかけて膨隆がある。周囲に組織萎縮は認められない。発赤、熱感はなく、膨隆部を圧迫すると強い疼痛を訴える。硬度は弾性軟、血腫様に着色している。

この似た2症例での相違点は、第1例では出血が主訴で疼痛を欠き、第2例では強い疼痛を訴えることである。第1例の肉芽腫は出血を防止する目的で切除し第2例は Glomus tumor の診断の下に剔出した。第1例の腫瘍は直径約 6mm で比較的良好に局限しているが、周囲に被膜は無く組織学的には血管のよく発達した肉芽腫である(図3)。

第2例で爪を抜去し爪下の腫瘍(図4)を直視すると結締組織性の被膜を以つて局限し直径約 8mm, 略々卵

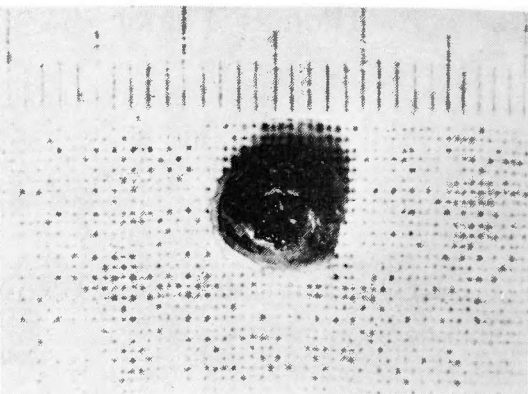


図 4

円形、赤褐色である。組織学的には、前者とよく似ているが不規則な管腔を有する小血管の周囲に特有な類上皮細胞即ち Glomus 細胞を有し、典型的な Glomus tumor の像である(図5)。

考 按

Glomus tumor は欧米では比較的多い疾患で既に多数例の報告がある。此の腫瘍と皮膚糸球体 Glomus cutaneum, Glomus neuromyo-artériels normaux との関係を説き動脈性血管 筋神経腫 Angio-neuromyome artériel として独立した1病型を確立したのは P. Masson (1924年) である。最初の報告例は英国の W. Wood (1812年) とされているが、T. Rowntree によれば、之に先立ち Cheselden によつて既に1740年に報告されていると云う。我国では、M. L. Mason and A. Weil が米国に於ける第1例を発表したと同年に、愛須が報告した1例(昭和9年)が最初で、其後約30例が追加されている。なお本病と推定される症例は我国でもそれ以前に報告されている(例えば沢田(昭和5年)の症例)。

正常の Glomus cutaneum は著明な動静脈吻合から成る終末器官構造であつて、四肢末端部即ち爪床、指趾等に最も多く存在する。従つてこの腫瘍も亦之等の部に多く発生する。

Glomus tumor は肉眼的には皮膚面より隆起した赤灰色乃至赤紫色の腫瘍として認められ、直径数 mm の円形乃至卵円形で 2cm を越えるものは稀である。爪床下に生じると爪は円味を帯びて盛り上り青色調を呈する場合が多い。組織学的には、内被細胞で囲まれた不規則な管腔を有する吻合血管を、多形性で円形乃至卵円形の核を持つた所謂 Glomus 細胞が取巻き、更に

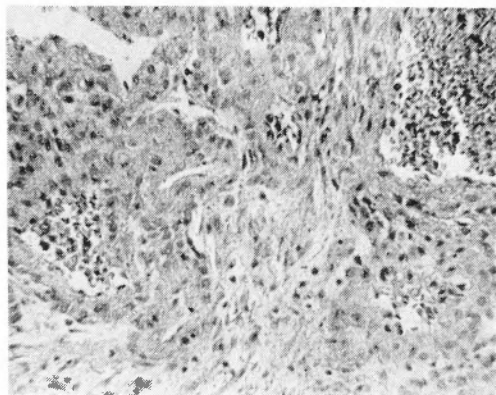


図 5

その外層に豊富な神経網が Glomus 細胞を纏絡する如く取囲んでいるのが特徴である。この Glomus 細胞は今日では一般に平滑筋原性のもと考えられ、また従って収縮作用を有するであろうと推定され、本腫瘍の特徴的症狀である圧痛或いは急激な温度変化に際する疼痛は此の Glomus 細胞の収縮によるものと考えられる。悪性増殖の傾向はなく、あつても甚だ稀である。正常の Glomus から Glomus Tumor に発展する機転は未だ分らないが本症例の如く外傷が誘因と思われる症例の報告が多い。最も特徴的な症状は強い疼痛でありその疼痛は持続性の事も、間歇性のこともある。後者の場合、疼痛は自発的に生ずることもあれば接触或は温度変化特に冷水につけた際に発現したりする。又 Adrenalin の注射により増強する。診断に際し皮膚の神経腫、脂肪腫、血管腫、線維腫、又爪下の肉芽腫、毛細血管拡張症、黒色腫、外骨腫、骨膜炎などと鑑別する必要があるが Glomus Tumor の特徴的な疼痛と着色とを思い出せばその診断は左程困難ではない。全く疼痛を伴わぬ症例も報告されているが、斯る場合は生検の他に鑑別手段はない。処置は切除にしくはものはない。

結 語

数日を隔てて来院した指末節の小腫瘍を主訴とする 2 症例が一見よく似ていたが、その 1 例を特徴的な疼痛と着色とを伴うことよりして Glomus Tumor と診断した。切除標本について組織学的に所謂 Glomus 細胞を明かに認め、之を他の 1 例の肉芽腫の組織像と対比して示説した。

(本文の要旨は第99回東海外科学会に於いて述べた)

文 献

- 1) 愛須敏夫：動脈性血管筋神経腫。グレンツゲビート, 8, 1101, 昭9.
- 2) 赤木制二：グロームス腫瘍について。外科の領域, 4, 47, 昭31.
- 3) 浅川清永, 吉村義一, 大久保誉一：Glomus tumor の 2 例。癌, 45, 267, 昭29.
- 4) 藤本吉秀, 比田井耕：皮膚糸球体腫瘍の 6 例。

- 手術, 11, 920, 昭32.
- 5) 古屋四郎, 北条重久：皮膚糸球腫の 2 例について。臨床外科, 14, 431, 昭34.
- 6) 井原俊男：Glomus tumor の 1 例。脳と神経, 5, 86, 昭28.
- 7) 河崎明彦：指端に発生した Glomus tumor の 1 例。癌の臨床, 3, 699, 昭32.
- 8) 小宅 洋, 五十嵐成男：Glomus 腫瘍と頸動脈球腫瘍, 特に神経線維の所見について。日病会誌, 43, 281, 昭29.
- 9) 久米川久雄, 森川義金：Glomus tumor について。四国医学雑誌, 7, 63, 昭30.
- 10) 槇 哲夫：疼痛結節としての Glomus tumor. 医学, 9, 134, 昭25.
- 11) 松下正幸：外鼻孔に発生した Glomus tumor (皮膚糸球腫) の 1 例。臨皮誌, 9, 1067, 昭30.
- 12) 岡本正義, 富永 健：Glomus tumor の 1 例。医療, 10, 478, 昭31.
- 13) 大森清一：動脈性血管筋神経腫。皮泌科学誌, 50, 358, 昭15.
- 14) 太田正雄, 山崎 順：所謂 Glomus tumor. 皮性科学誌, 53, 85, 昭18.
- 15) 沢田 光：皮下海綿様血管筋綿維腫, 皮膚科紀要, 16, 568, 昭5.
- 16) 谷村保夫：グロームス腫瘍の 1 例。皮膚と泌尿, 20, 24, 昭33.
- 17) 富樫良吉：巨大な Glomus tumor の 2 例。臨皮誌, 12, 841, 昭33.
- 18) 戸沢 孝：皮膚グロームスに就いて, 皮性科学誌, 52, 421, 昭17.
- 19) 古田信夫, 柴 拓：グロームス腫瘍に就いて臨床外科, 6, 310, 昭25.
- 20) Bailey, O. T.: The Cutaneous Glomus and its Tumors……Gloangiomas. Am. J. Path. 11, 915, 1935.
- 21) Horton, C., Maguire, C., Georgiade, N. and Pickrell, K: Glomus Tumors; analysis of 25 cases. Arch Surg., 71, 712, 1955.
- 22) Masson, P.: Le glomus neuromyo-artériel des régions tactiles et ses tumeurs. Lyon chir., 21, 257, 1924.
- 23) Murray, M. R. and Stout, A. P.: The Glomus Tumor. Am. J. Path. 18, 183, 1942.
- 24) Rowntree, T.: Multiple Painful Glomus Tumours. Brit. J. Surg., 40, 142, 1952.
- 25) Thies, W. und Gloggeniesser, W.: Zur Frage der Nervenbeteiligung am Aufbau der Glomustumoren Arch. Dermat. Syph. 197, 1, 1953.